

探検・探査

3 号

1995 年 2 月

横浜市立大学 探検・探査の会



次のステップを考えて

会長 大野正夫

今年度の大きな課題の天山トムール峰の登頂は、天候が不順で達成出来なかったのは残念であったが、ムスターグアタ峰に登峰に成功したことは、探検・探査の会にとって記録すべき成果であった。良くここまで頑張ったと拍手を送りたい。3回の登峰の記録は、ぜひ一冊の本にしておきたい。

私は四国に来て、暫くは四国の山を歩いたが、10年来、山登りらしいことから離れてしまった。8年前に南極の夏に、裸岩地帯を2週間ほどテント生活をして、学生時代を思い出した。テント生活は、夜の会話の時間が長い。食事をして寝る前に、酒を飲みつつ、いろいろと雑談に費やされた。探査会の時代は、ラジュースの音を聞きながら、伊東さん、寺島さん、横山、松橋らと火をかこんで、話こんだものだった。宮崎、河合、木村らが入ってきて、歌を歌うようになった。もっとも聞き役ではあったがー。

またここに来て、妙な役を引き受けるようになって、昔を振り返ることが多くなった。横浜市大の時代が、それからの生活の糧になっているように思える。今でも仕事で、海外を飛び回り、船に乗ったり、泳いだりしているが、その段取りは探査会の時に、身につけたものではなかったかと思う。

さて回顧談は、これくらいにして、天山トムール峰の登頂計画は、中断するという。探検・探査の会で、次のステップを考えてはどうだろう。昨年の6月に北京に立ち寄り、南極の友達の山岳気象学の高教授に会ったら、チベット地方は、山も高原も面白いと勧められた。企画があれば協力するとも言われた。山に登る者、高原を歩く者、生物や民族的調査をする者などのグループを作ってはどうか。



トムール登山隊と「探検・探査の会」のこと

幹事長 小森享二

1990年のトムール隊の遭難をきっかけに「探検・探査の会」は生まれた。そして昨年、1994年、唯一の組織として「探々会」が後援することになって、トムール隊が登頂に三度目のチャレンジを試みた。しかし、残念ながら登頂は成らなかった。

昨年の8月下旬、トムール隊の残した計画で最も遅い場合でも、何か情報が入っていい筈なのに何も無いという連絡を受けた。大丈夫だろうと思いつつも、いや、もしかしてという不安が頭をよぎった。それに、ある人からは「もうそろそろ留守番をしている者として何か行動を起こすべきではないか。」という意見も出た。私は「必ず現地から何かあったら連絡がある筈だから、もう少し待った方がいい。」とアドバイスした。それから数日して、留守連絡先の小嶋君から「予想以上に多い雪のため、登頂を断念。無事に全員帰還した。」という電話連絡を受けた。登頂できなかったことについては三度目ということで大いに期待していただけに少しがっかりしたが、それよりも連絡が遅れて、やきもきした分だけ全員無事帰還の報には心底ほっとした。

トムールは雪崩を克服すれば、登頂は可能と聞いており、大野会長の計らいで中国の専門家から天山山脈の気象データを事前に入手していたとのことで、その辺は十分に準備されているな、と非常に心強く思っていた。しかし、一方ではトムール峰のある新疆ウイグル自治区には中国の核実験場があり、核爆発の影響で、トムールの雪崩が誘発されるかもしれないという不気味な話も聞いていた。核実験の予定など公表されないし、トムールに登山隊が入っていようとお構いなく核実験は行われるであろう。もし、それが事実であれば非常に危険性があることに思えた。しかし、確率の低さを考えれば、杞憂かなという気もした。そして、このように期待と少しの不安を抱いてトムール登山隊を送り出した。

今回のトムール隊は過去二回の経験を踏まえ、周到な準備をし、少数精鋭で挑んだ。しかし、登頂は成らなかった。でも、今回のトムール隊は大きな成果を

残したと思う。トムール征服の鍵は高度順化だという結論をもとに7,000m級のムスターグ・アタ峰にアタックして登頂を果たし、すぐさまトムール峰に挑むという新しいやり方を試みた。こういったことは、あとに続く登山隊にとって大いに参考になると思う。それから、小嶋君から連絡を受けた時に聞いたことで非常に感銘を受けたことがある。それはトムール隊が『雪が降った翌日には登らないという鉄則を守った。』と語っていたことである。三度目の挑戦ということで、是が非でも登頂したいという逸る気持ちを抑えることは大変だったであろう。こういった気持ち、姿勢が全員無事帰還につながったのだと思う。私はこういうトムール隊を後援できたことを誇りに思っている。

トムール隊が出発する前の壮行会の席上、取るのは金メダルか銀メダル以外にないということを私は述べた。その意味は登頂を果たし、全員無事帰還すれば文句なしの金メダルだ。しかし、犠牲者を出しながらの登頂、そして登頂もできず犠牲者も出した場合、それらは論外で、登頂できなくても全員無事帰還することが銀メダルである。従って、トムール隊が取るのは金、銀以外にはないということを話した。今回のトムール隊は悲願の金メダルは逸したものの、堂々たる銀メダルを獲得したと私は思っている。

私達の「探々会」はトムールをきっかけに生まれ、そして経験は浅いが唯一の組織的後盾としてトムール隊を後援してきた。現在、「探々会」の関係者の中で自由に活動を企画したり、参加したりできる人は極めて稀な状況である。このような「探々会」に関わる大部分の人たちにとってトムール隊を支援することは自分の心や夢をトムール隊に託すことであったと思う。微力ながらトムール隊を支えていたと思っていた私達だが、実際に支えられていたのは私達の方であったかもしれない。これからもトムールと「探々会」の関係は諸々の形で継続していくと思う。そして、いつかトムール峰は登頂されるであろう。先般、トムール隊の報告会において、西堀隊長(第一回トムール隊で遭難)の夫人が話された短いスピーチの中にトムールに寄せる並々ならぬ情熱を感じた。その熱は冷めることなく伝播し、後に続く人たちを衝き動かすにちがいない。そして、次回挑戦の時には国内の留守番ではなく、ベース・キャンプに勇躍してのり込みたいと考えているのは私だけではないと思う。

'94. 天山トムール峰登山隊遠征

私たちは昨年6月1日から約3ヶ月間にわたって、3度目の中国遠征をおこなった。目的は天山山脈トムール峰(7,435m)の登頂で、事前にパミール高原のムスターグ・アタ峰(7,546m)で高所トレーニングをおこなうなど、万全を期して本番にのぞんだ。

しかし、過去の遠征経験からは予測もできなかった悪天候に阻まれ、トムール峰の登頂を果たすことはできなかった。

以下は登山隊の行動概要と、吉見敦司による行動記録、そして神奈川新聞に寄稿した吉田宣明(山岳部OB)のエッセイである。

登山隊の詳細な報告書は今年3月ごろに発行予定であるが、この場を借りて遠征の中間報告をさせていただくとともに、計画に協力してくださった会員の方々に感謝の意を表したい。

田村 康一

登山隊行動概要

期間：'94.6/1～8/27(88日間)

地域：中華人民共和国新疆ウイグル自治区

目的：トムール峰中国側からの登頂

予算：460万円(負担金360万、寄付他100万円)

戦略：セミハードスタイルによる速攻登山。

結果：7/1、ムスターグ・アタ峰登頂(吉見敦司)

：8/13、トムール峰登頂断念

隊員：吉田 宣明、吉見 敦司

：田村 康一(以上横浜市大)

：中里 雄一(亜細亜大、JAC)

ムスターグ・アタ登頂記

前半で天気が悪く、行動できない日が続いたので、日程を使い果たし、下山日が迫っていた。隊の連絡官で、登山活動にも参加している胡さんとC3入りした6月30日、アタックに残された日数は僅か1日、明日悪天ならアタックは中止して下山という状況のなかで、「明日晴れますように!!」と2人で夜空に向かって大声で願をかけた。

ムスターグ・アタの目的は6kmの宿泊高度における順化で、それは既に果たされていたのだが、私はどうしても頂上に行きたかった。短期速攻の登頂を計画しているトムールのためには、なるべく高いところまで順化しておきたかった。ムスターグ・アタの登頂がトムールの頂へ導いてくれるはずだった。

7月1日、興奮からか目がさえてほとんど眠れず、起床予定の6時が待ちきれずに起きて外をみると、満天の星空である。胡さんと「天気好!好!!」と喜びあいながら出発の準備をする。8:25に標高6,000mのC3を出発、天気は快晴だがかなり冷えこみ、風も強いので非常に寒い。雪面も固くてスキーが使えず、ツボ足で進む。ラッセルは30cmくらいだ。

9:30頃、陽が当たるようになってもお寒い。-20℃を下回っているだろう。あなどってオーバーズボンではなく、雨合羽にしたのが間違いだった。下半身が寒くてしょうがない。

11:30、6,300m着。胡さんが少し遅れ気味だ。このころ、ようやくスキーが使えるようになる。スキーのない胡さんとの差は開一方で、6,400mで1時間待つ。6,550mで再び胡さんを

待つが、30分以上待っても一向に姿が見えず、C3に下った可能性もあるので、1人でアタックを続ける。

C3からは単調な斜面の繰り返しで、うんざりさせられる。目の前にはドーム状のピークが見えるが、残りの高度からすると頂上とは考えられない。しかし、「高度計が壊れたかも」などと、ほとんどあり得もしないことを考えながらも、急がずゆっくりと歩を進める。

17:30、ドーム状のピークに立つと、上部には雪原がはるかに続いていた。18:00、6,700m着。ここから上部に小さなピークが見え、トランシーバーとカメラだけ持ってアタックを続行する。そのピーク下に着くと、さらにその奥になだらかなピークがあり、絶句する。

「今度こそ頂上だろう」そのピークをひたすら目指す。

20:15、ついに頂上に立つ。高度計の標高は7,050m。日没間近（北京時間のため23時頃までは明るい）なので、感慨に浸る間もなく、写真を撮ってすぐに下山にかかる。下りはスキーで快適に滑るつもりだったが、転倒した際の体力の消耗を恐れてツボ足で下る。ちなみに私のスキー経験は、ゲレンデ2回のみである。

6,600mで、先に下ったと思っていた胡さんが私を待っていた。一緒に下るために待っていたのかと思ったら、「ここでビバークしよう」と言う。私はとてもそんな気になれず、C3に降りようと説得するが、胡さんは「どうしてもここに泊って、明日頂上を狙う」と言い、その気迫には並々ならぬものがあったので、ビバーク用具一式を渡してC3へ急ぐ。

下りとはいえ、長時間の行動で疲れた身体にはツボ足のラッセルはきつい。陽が沈むまでには帰れるだろうと思っていたが、思うように足が進まず、すっかり陽も暮れ、ヘッテンで足元を照らしながら下る。

0:30、C3着。テントにはコンロはなく、缶メタでカップ一杯の水を30分かけてお茶にし、それを飲んでシュラフに入ったのは1:30だった。

ムスターグ・アタの登頂には特別な感慨は抱かなかった。ただ、それまで雲と区別がつかないほど、はるか遠くに見えていた天山の山々が、そのいずれかであるはずのトムールが、少し近くなったように感じた。

吉見 敦司

トムール登頂断念

8月10日、前日の雪壁の偵察で好感触を得ていた私は、この日に賭けていた。残された時間はあと僅かだ。ここ1～2日の間には稜線に抜けなければならない。今年のトムールは好天が続かないことを考えると、この日が実質的な雪壁アタックのタイムリミットといえた。その夜の眠りは浅く、何度か目が覚めた。

明け方、外は満天の星空だった。ABCで雲ひとつない朝を迎えるのは初めてのことだ。この瞬間をどれだけ待たろう。気持ちの高揚を感じながら出発の準備にかかる。朝食は大事にとっておいたちらし寿司だ。

だが、中里がおかしい。頭痛と吐き気がして食えないという。彼はそれまで、雪壁に対

する不安や恐怖を口にすることがあった。前日、不安げに雪壁を見つめていた彼の表情が頭に浮かんだ。

その日、日中はずっと晴れていた。まだ時間はある。もう1日晴れてくれたら、という思いをよそに、20時頃から強い雪が降りはじめた。

8月11日、朝。雪はやんでおらず、外の積雪は40cm以上。3回のトムール遠征でこんなに積もったのは初めてだった。全身の力が抜けた。終わった、そう思った。

しかし、可能性が0になったわけではなかった。日程では13日が雪壁突破のタイムリミットだ。今日、明日ともに晴れて降雪がなく、13日も好天ならチャンスはある。雪の状態次第ではいける可能性はまだあった。朝降っていた雪は9時頃にやんだ。その後は雲一つない快晴となり、この好天は1日続いた。

8月12日、朝早く雪壁の状態を偵察に行く。基部より200m上部にて雪の弱層テストをおこなう。最上部には5cmほどの固い雪の層があり、その下は40cmの柔らかい雪の層となっていて、下の層は軽い力で簡単にはがされてしまった。この状態では上にいくことはできない。がっくりうなだれていると、すぐ右のルンゼで3回たて続けに表層雪崩が起り、逃げようにしてABCにかけ下る。絶望的だった。明日になっても状態は変わらないだろう。だが、まだBCには下りたくなかった。これまで多くのことを犠牲にしてやっとここに来たのだ。ダメだとわかっているが無駄な努力がしたかった。

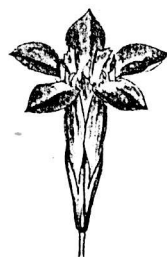
8月13日、頂上にいけるだけの装備と食糧を持って出発。最後のあがきである。陽がで

ると、雪壁も周りの山も紅く輝きはじめる。国境稜線が見える。あそこから見る風景はどんなに美しいだろう。昨日と同じ場所で、同じ作業をし、最後の確認をする。雪の状態は昨日と変わらない。それに加えて、昨夜、断続的に降雪があったこと、今日は気温がかなり高いこと、中里の調子がよくないことから、これ以上の登高は断念し、今日をもって登山活動を中止し、ABCを撤収してBCに下ることにする。

危険を冒してもいいから登りたい、という思いが、私をしばらくその場にとどまらせた。稜線はすぐそこに見えるのだ。2時間もあれば抜けられそうだった。

大量のABCの荷を、無理矢理ザックに押し込み、9時40分、雪壁に向かって手を合わせ、何度も振り返りながら、ABCを後にした。

吉見 敦司



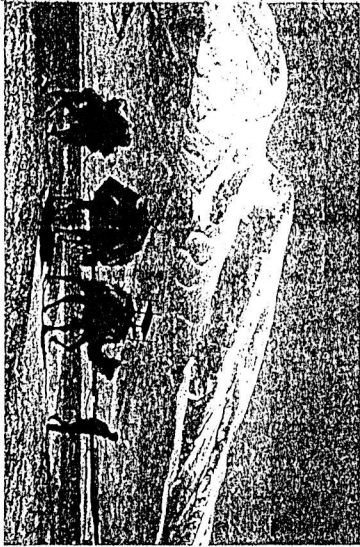


中央右側の壁に懸かっているのがトール生身、アツタス・スキャベンジャー(左)からスキャベンジャー(右)への岩を渡る岩壁の様子

3度目の挑戦も涙

はるかなるトール峰

眠る仲間の遺志引き継ぎ

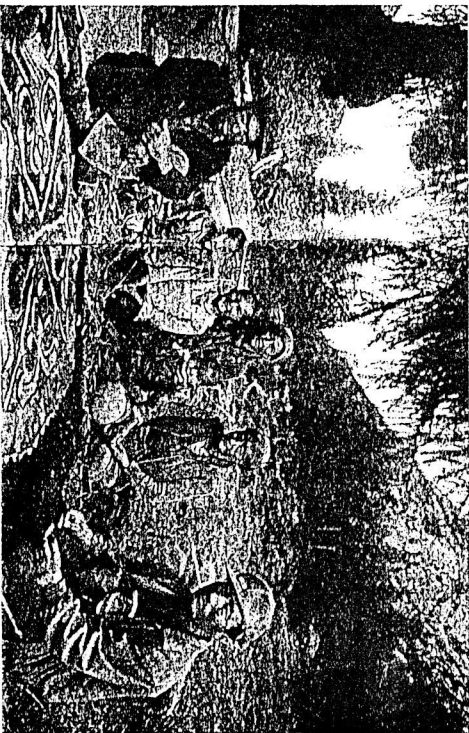


トール峰の麓に設置されているトール生身、アツタス・スキャベンジャー(左)からスキャベンジャー(右)への岩を渡る岩壁の様子



横浜市大OB登山隊

トール生身(左)とスキャベンジャー(右)の岩壁に懸かっている様子



トール生身(左)とスキャベンジャー(右)の岩壁に懸かっている様子



フィールド・ワーク この一年

大槻 英二
(1989年卒)

昨年4月、就職後5年間勤めた取材記者から内勤の編集者に「転職」させられた。同時に、ポケベル常時携帯24時間出勤態勢の生活から解放され、自分の時間を取り戻せた一年でもあった。少ない休日を寄せ集めて、フィールドに出かけた記録を綴ってみた。

[7年ぶり西表島再訪] = 94年1月14~20日

大学3年の秋に、島の東側・古見から西側・浦内川へ横断したが、今回は浦内川から大宮に抜ける逆コース(約20km)に挑んだ。

南国のジャングルで、いつも悩まされるのがヒルである。今も、私の足首にはフィリピンのジャングルで吸い付かれ、マニラのばい菌を吸収して腫れ上がった傷跡が痛々しく残る。前回、那覇空港で入手した「ヤマピカリヤーの島」(小野紀之・ひるぎ社)という本に「ソックスの下に婦人用ストッキングをはくといい」と紹介されていたので、今回はその方法を試してみた。

休憩時にスパッツを脱ぐと、いるはいるはナメクジのようなヒルが4、5匹もへばりついてた。しかし、身体への被害はゼロで、このヒル除け法がどんな高価な装備や薬よりも有効であることが実証された。

冬の沖縄は北風が吹きすさび、空はどんよりと曇り、エメラルドグリーンのはずの珊瑚礁も心なしか色あせ、魅力に欠ける。やはり、春先か秋に訪れるのがベターなのだろう。夏はチャラチャラした連中がうろついているので避けたい。石垣島のタクシーの運ちゃんは、明らかに曇っているのに「きょうは珍しく晴れだ」とうそぶいていた。

[日光雲竜溪谷・山岳遭難救助訓練同行取材] = 1月30日

「探検・探査2号」に掲載した「巨大ツララに挑む」の記事と同じもの。あの記事に触発されてか、今年はTBS「ニュースの森」のクルーやら読売の写真記者やら大掛かりな取材団に膨れ上がった。暖冬の影響か、氷瀑は前年以上に貧弱なものだった。

[奥日光・白根山(2577.6m)5回目の登頂] = 6月11日

現役のころは湯元からテントをかついで中っ曾根や白根沢ルートで勇ましく登ったものだが、卒業後、菅沼からあっさり日帰り登山できることを知った。

白根山南東斜面では数年前から樹木の立ち枯れが深刻化している。その原因として酸性雨(霧)の可能性があることを環境庁は去年になって、ようやく認めた。しかし、日光の自然を良く知る人は、昭和57年の厳冬の後遺症ではないかとか、ハバチによる被害ではないかなどと異論を唱えている。このテーマは宇都宮に在る間に取り上げたかったが、未だに目の目をみていない。白根山の山林は二荒山神社の所有物であることを理由に行政も黙殺しており、野放し状態にある。

[香港2泊3日駆け足旅] = 6月14~16日

大学1年の冬、中国に向かう玄関口として初めて足を踏み入れた海外が香港だった。今回は全日空に勤めるカミさんの「配偶者特別優待券」なるものを使って、タダで飛んだ(ただし、機内食代として4000円請求された)。

啓徳空港はビルの谷間に急降下する離着陸の難しい空港として知られるが、今回、なんとゴー・アラウンド(着陸復行)を体験。座席の正面のスクリーンに写し出される映像が、滑走路から車輪が着かないまま海に変わったのである。名古屋空港の中華航空機事故の直後だっただけに、墜落事故に遭ってタダで乗っていたのがバレたらいやだな、などと恐怖に怯えながら、最後の瞬間を写真に収めようと手に汗を握りながらカメラを構えた。20分後、2度目のトライで難なく着陸し、スクープは幻に終わった。

香港の人たちは携帯電話やポケベルを人前で鳴らすのが好きで、鼻息荒いアジアの活気を感じた。日本はお役所の規制に縛られているうちに、善し悪しは別として、新製品を安く普及させる活力を失ってしまったのだなとしみじみ思った。

2日間、歩き回って見つけた新名所。セントラルの恒生銀行からヴィクトリア・ピークの中腹へ続く全長800mのエスカレーターと動く歩道(93年10月開通)。ディズニースタンドのアトラクションのように、足を使わずして雑居ビルの中のマージャン風景やら露店街など庶民から上流階級の生活が垣間見れて楽しい。ただし、エスカレーターは一方通行なので、帰りは永遠と階段を降りなければならない。

[踏んだり蹴ったり奥多摩・大岳山(1266.9m)登山] = 8月5日

せっかく東京に出てきたのだから、たまには都会の山にでも登るかと思いついたの

が大間違い。いままで国内でも一級の自然を有する山に登ることが多かったため、その目で奥多摩を見ると、針葉樹ばかりの貧困な林、なまぬるい湧き水、出会う動物はガマガエルばかり…で辟易した。おまけに山頂では曇って展望が開けず、下山途中から雷雨に襲われた。ずぶぬれになってたどり着いた奥多摩駅で、近くに温泉はあるかと駅員に尋ねたら、「ないっ」と無愛想に一喝され、青梅線も落雷で不通になってしまった。代替運行の無料バスに乗りながら「奥多摩へは2度と来ぬ」とカミさんと誓い合った。

〔「日本のマッターホルン」槍ヶ岳(3180m)に挑む〕=9月4~9日

上高地の小梨平にあるキャンプ場が静かだいいと聞いて、ついでに槍ヶ岳に登ることにした。これまで北アルプスと聞くと、「ヤマケイ」OYの世界のようで敬遠していたが、なるほどミーハーなハイカー(ブス女3人組とか…)も来るだけあって美しい所であった。最もポピュラーで楽に登れるという槍沢ルートをたどったが、途中、徳沢あたりまでは水洗の公衆便所があり、紙も備えてあるのには驚いた。

夏山シーズンのピークも過ぎ、槍沢キャンプ地では私たちのほかは一人の青年だけ。彼は何やらテントの中でガサゴソ作業した後、上半身だけテントから乗り出し、下半身はテント内に残したままラーメンをすすり始めた。我々は星空の下でレトルトのトムヤンクンスープを食していたが、寒いなら完全にテント内で食べればいいのに上半身だけ乗り出して食べるという、その姿はこっけいであった。彼は探検部のOBで言えば内野健太氏のような風貌で色白く目が細い。冬でもTシャツ姿で学内を自転車で闊歩していた内野氏は現役時代、上半身・植物人間、下半身・自転車の「ケンタウルス」と呼ばれていたが、彼は食後、再びテント内にひきこもってガサゴソやり始めたので、我々は彼を「コモリくん」と名付けた。

コモリくんとは翌日のピーク・ハントも下山日程も一緒になった。彼に「どこから来たの」と尋ねたら、「あしたの朝、午前11時15分発のバスで大阪に帰ります」と少し的はずれな答が帰ってきた。翌朝、上高地のバスターミナルでコモリくんが自分の乗るバスがわからずオロオロ歩いているのを見かけた。

〔谷川岳マチガ沢グルメキャンプ〕=10月9~10日

天山帰りで無職で飢餓に直面していた田村から「谷川で鍋を用意して待っているから4人分の食料を持ってこい」と電話があり、夜勤明けで眠い目をこすりながら地底にある土合駅からマチガ沢まで荷上げた。

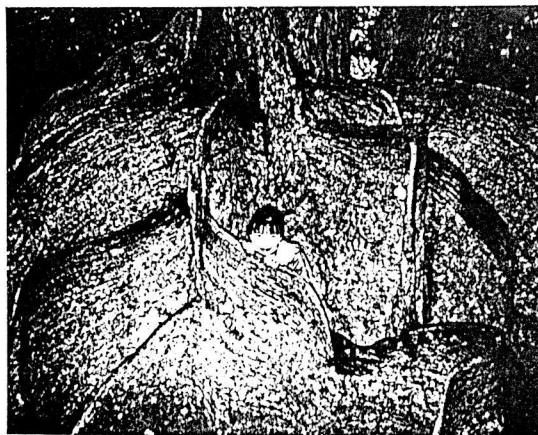
この時、披露したのが「チゲ鍋」。烏ガラスープでだしをとり、白菜キムチ、ヤンニンジャン、肉をほうり込んで煮る。肉がやわらかくなったところで、ねぎ、しいたけ、にら、豆腐などの材料を加える。椎名誠の「あやしい探検隊」で料理人を務める林政明の「リンさんチャーハンの秘密」(角川文庫)から盗用したものだが、辛いものの好きの高梨氏からは好評を得たものの、相木(妹)嬢からはムッとされた。

〔奥日光・光徳XCスキー強化合宿〕=95年1月9~11日

カミさんを山に連れて行く際、いかにアメをくつつけるかが課題だ。キリマンジャロとサファリに始まり、キャンプや温泉と登山と言った具合に……。今回はクロスカントリースキーと温泉を組み合わせた。しかし、初めて旅館に泊まるという墮落したものになってしまった。

「XCスキーはエッジがないから転びやすい」やら「疲れるから嫌だ」とか文句ばかりたれるカミさんに、持参したワカンジキをはかせ、雪上を移動するのにXCスキーがいかに有効かを教え込んだ。

今年も「原稿より健康」を第一にフィールドで遊びまくりたい。



「ヤマネコ」とサキシマスオウノキ=西表島で



「マッターホルン」を背に=槍ヶ岳で

☞ 真新しい肩の小屋で 1994年3月12日(土)

雪例年より多く谷川遭難者慰霊碑も埋まっている。10:03 チェーン無しで土合口に着く。曇っているが寒さは無い。谷川岳登山指導センターに入山届けを出し、ロープウェイで天神平へ、更にリフトで502m地点天神尾根の起点まで行く。雪がちょっぴり舞い太陽が白い中、つば足で先人のトレースをたどる。途中何パーティーかが雪洞掘りの訓練をしている。右手前方に西黒尾根のザンゲ岩、ワカンジキを付ける。

11:54 熊穴沢避難小屋だ、橙色の鉄柱が50cm程頭を出している。12:10 露岩の上で休む、高度計は1620m、左手の尾根筋にはガスが薄くかかっている、 -4°C だ。上がる我らに下る何組か。背中から抜いた赤布の篠竹をさしつつ、傾斜がきつくなってきたが見通せる天神尾根を快調に進む。前方が広がって来たからじきに肩の小屋だ。

凍り着いた避難口をピッケルで突っつき、13:34 肩の小屋の住人となる。しばらくすると西黒尾根を上って来たという男性2人が雪まみれで入って来る。我ら30分ほど休んで頂上へ向かう。14:14 頂上着(トマの耳)、僅かにオキの耳が見えたがすぐにガスの中。缶ビールで乾杯!この7月帰国予定のステイヴンにとってはラッキーだ。去年の2月には荒天のため熊穴沢避難小屋までで引き返したものだだったから。

肩の小屋は真新しい、無人になってしまったが群馬県が再建して1年程しか経っていない。断熱マット・シュラフに腰を落ち着けまた乾杯!冬は鍋ものよ、ウイスキー・ビール・ワインは友達よ、仕上がりはウドンよ。外はガス、風無く、雪静か。だが夜半から吹雪、小屋をゆする風が息を始めた。

☞ 赤布をみつけホッと 1994年3月13日(日)

気象情報では、太平洋側は晴れ日本海側は雪だという。ここもこれ以上好天は望めないということか。吐息が白く流れる。何かがあってはいけない、5人ともザイルを付ける。9:00 肩の小屋からガス・風雪吹き荒れる外へとびだす。 -10°C 。この小屋から天神尾根への出だしはアクセントの無い斜面が広がり、西黒沢に迷い込んでしまうことがある。トレースも目印も無く視界数メートルというのでは有視界歩行は駄目、地図とコンパスで方向を決める。宮崎がトップに行く。すぐに風雪に翻弄されている赤布をみつけホットとする。ゆっくり慎重に地形を探りながら次の赤布をみつけながら下る。熊穴沢避難小屋でザイルを外す。2~3のパーティーが上って行く、スキー隊もあり。小ピークを過ぎ下りにかかった所で突如前を行く仲間が滑落、何とか灌木にしがみついたが、駄目なら20~30mは落ちたろう。途中、スキーを使って堅穴式簡易雪洞を掘っている一団あり、群馬岳連の講習会で、宮崎の女子校時代の教え子もいた。

天神平からはロープウェイを見上げながら沢に沿って下る。50分程で土合口谷川岳登山指導センターに立ち寄り下山を伝える。



私の探検部以後……②

68年入学 小森 享二

1983年10月、私は妻と三人の娘(当時、6才半、4才、10カ月)を連れて、東京から転勤のため沖縄に移り住んだ。それから二年後、胸一杯の感慨を抱いて東京に戻ってきた。沖縄で暮らした二年間は自分の人生に実り豊かな時間を与えてくれた。以下に記すのは私が沖縄を去るときに作った詩で、彼地で共に働いた人達の前でお別れの言葉として朗読した。私が探検部の現役時代に、ある先輩が南の島での合宿の打ち上げで、キャンプ・ファイアーを前に自作の詩を朗読したという話を聞いたことがある。探検部にはロマンチストが似合うのかもしれない。

わたしの美ら島、沖縄

沖縄はわたしの故郷になった
その出会いは余りに偶然であった
気がついたら沖縄の風景の中にいた
日本列島の南端に位置し、縄のように連なる島々
そこには優しい眼差し、心穏やかな人たちが先祖を敬いながら
寄りそうように暮らしている
フクギの木に囲まれた赤瓦の屋根の下、やわらかい風が抜けていった
外に出れば、目にしみる青い海、白い砂がまぶしく輝く
海の彼方にはニライ・カナイがあるという
白く輝く強い陽射しが肌に刺激的でまばゆい
あおあおと繁ったガジュマルの木の下に体を横たえる
そよぐ風で汗がかわく
見上げれば、色濃い緑の葉の間から青い空に浮かんだ白い雲
デイゴの花で街が急に色づく
デイゴの花は沖縄ソバのショウガを連想させる
ネギは葉っぱだ
琉球文化は今でも脈々と息づいている



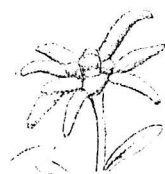
紅型、壺屋焼、漆器どれも世界に冠たる工芸だ
金城次郎は人間国宝になった
芸能も素晴らしい、組踊り、三味線
お祭りは民衆と一体になって盛り上がる
ハーリー、エイサー、大綱引き、どれも感動の渦に巻き込まれた
イリチー、チャンプルー、ソバ、地味だが味わいのある料理
泡盛の酔いは心地がいい
腰が落ち着き、話が静かに進む
お湯割もいいし、ロックもいける
これは完全な独自の文化体系だ
琉球文化は観光の宣伝文句ではない
長い歴史と伝統に培われた文化が今、生きている
もし、日本、日本人が沖縄は日本だと言うのなら
沖縄は誇るべき日本の宝だと言いたい
ひめゆりの塔、白梅の塔、平和祈念堂、摩文仁の丘
沖縄は平和の象徴
本当の戦争を経験したのは沖縄の人たち
日本の捨て石にされた沖縄
思い出すだけで、胸をつまらせ、目に涙を一杯ためた顔に出会った
その無念さは、はかりしれない
いつまでも平和をと願わずにいられない
三人の我が娘たちは沖縄の風土に育まれ、たくましく、元気に成長した
いろいろな土地を旅し、多くの出会いがあった
本当に実り豊かな二年間であった
ありがとう美ら島、沖縄
さようなら美ら島、沖縄
また来る日まで私の故郷を守ってください
これが私の最後の願い

鉄道は楽し

文理 人間・社会2年 小原 昌史

わたくしが鉄道研究（旅行）部に入ってからこれ1年以上経つ。何度も言っていることだが、決してオタクの部活ではないので、誤解しないで頂きたい。自分でも信じられないほど、方々を旅した。その度にうまいものを食って金がなくなった。が、結構楽しいのでやめられない。そういったいろいろな経験や知識をもとに、鉄道旅行のアドバイスのようなものをこの場を借りて皆に伝授してあげてやろうと思う。単に旅行だけでなく、合宿などのときにも役に立つであろう。

まず切符について。われわれ学生にとって強い味方はやはり『青春18きっぷ』である。一応5枚つづりでの発売であるが、大学生協では1枚からでも売ってくれるし、何人かで1セット買ってもいい。1枚当たり2260円、普通と快速のみで辛いにしても、一日乗り放題ならば安いものである。無人島合宿経験者なら知っていると思うが、1枚で熊本まで行けたりする。（自分はやってはいないが）さて、部会などでよく話になるのが、学割と青春18どっちを使うと安い。距離のうえから見ると、70キロ未満では普通運賃、160キロ未満では学割、それ以上では青春18きっぷを使うと安い。横浜を中心に考えると、東海道線では焼津より先、山梨方面は小淵沢あたりより先、東北線では黒磯の手前あたりより先、新潟方面なら渋川（新前橋を少し越えたところ）より先へいくのなら、青春18を使うのがいい。従って、成田空港や藤本さんの住む小山へJRを使っていくなら、学割を使うといい。400円ほど安い。これからは賢い切符の買い方をして、より安く旅や合宿をしよう。



お得な切符で忘れてならないのが周遊券。去年の3月に九州、8月に北海道を旅行したときも、当然これを利用した。九州も北海道も特急、急行が結構充実していて、特に北海道は夜行の急行列車も走っていて、宿代を浮かすことができる。ぜひぜひこれを使って旅行してほしい、いや旅行しなさい。ただし、四国はあまり交通の便がよくない。

次に列車の車両について。北海道や九州は別として、それ以外の特急列車には恥ずかしながらあまり乗ったことがない。特にこの列車が良いとかカッコいいとか、そういうことにあまり興味がない。しかし全く興味がないというわけではないので、みんなが知ってそんなことを少しばかり書こう。まずのぞみ号に乗ってみたいと思っている人、次にあげる列車にお乗りなさい。車両はのぞみ号とおんなじ。一部新横浜にも止まります。

ひかり号 201, 205, 217, 219, 221, 227, 235, 239, 243, 253...

206, 212, 220, 228, 232, 234, 236, 246, 248, 258...

食堂車で飯を食ってみたいと思っている人、残念ながら新幹線もブルートレインも食堂車が減ってきている。鉄研部員の話では、近い将来なくなるのではという声も。今のうちに。成田エクスプレスに乗ってみたいと思っている人、金の無駄、おやめなさい。JRの横須賀線か、京急一京成ルートで十分。それでもカッコいい列車に乗りたい！というのならば、最近開港した関西国際空港へ乗り入れている特急列車がなかなかの評判です。JRのはるか号と南海電鉄のラピート号。ぜひお試しを。個人的には（写真で見たかぎり）リゾート踊り子（東京ー伊豆急下田 横浜発13:50）が好きである。列車については鉄研の中でも素人。あまり偉そうなことは言えぬので、このへんでやめる。（94年度 探検部員文集「羅新盤」より転載）

探検部に入学してから、はや1年が過ぎようとしています。入学式の後、サークルの勧誘で人々がごったがえすなか、何かかわった、おもしろそうなサークルはないかとまわりを見まわしたところ、人波から20メートルほど離れたところに「探検部」という垂れ幕の前にただ、ぼーっと二人の男がすわっていました。私はなるべく目を合わせないようにその場を去りましたが、2、3日後「ヒマラヤには雪男がいる」と書かれたうさん臭いチラシと、新歓で富士の樹海に行くということに魅せられ、探検部に入部しました。

それ以来、夏までは毎週のように合宿に行きましたが、いつも感じることは、ザックを背負った自分に世間の目は冷たいということです。電車の中や駅で好奇の目にさらされ、けっして快い気分はしませんでした。

しかし合宿へいくと工事現場のおじさんがおくってくれるなど涙のでる思いもします。その中でも夏合宿での人々の親切さ、暖かさは本当にありがたいものでした。

竹の沢では撤退後、村上で麦茶から煮物、メロンまでご馳走になったり、山形ではいった居酒屋では、風呂にはいらせてもらった上に、図々しくもとまらせてもらったりした。さらに最上川の筏下りでは、大江町の観光課のかたにいたれりつくせりのサービスをうけた。このほかにもたくさんの人のお世話になりました。ひとの暖かさを肌で感じとった合宿となりました。



探検部と野球と私

生物科1年 星川 亮

私が探検部に入って初めての部会で印象に残っていることは、プロ野球のセリーグにおける優勝チーム当てトトカルチョのことだ。一番最初の部会で新入生に賭博をさせるとは。なんていいところなんだと私は思った。その時私が選んだチームは当然広島東洋カープを選んだ。前年、つまり1993年における広島は、打撃力はほかのチームに勝とも劣らないものではではあったが、投手力の弱体化のため、見るも無惨な敗退を期してしまっていた。当然、監督の三村さんはそのところをよく理解して今年こそは完璧な体制で望んでいける、そう私は思っていた決断だった。しかし、案の定、ある程度予想はしていたものの、やはり少し期待していたのだが、投手力が弱かった。そのため、あれほど打撃好調で、あわや優勝かと思わせたのであったが、最後には投手力の差で3位に甘んじてしまった。

ここで私は、探検と野球のある接点に気がついた。野球とは、前に延べて打撃つまり攻撃と、投手力つまり守りの2つがそろわないと勝てない。探検についてもしかり。攻撃つまりこれはやる気、意欲とおきかえられる。守りにおいては、計画とおきかえられるのである。探検しようとする意欲、そしてそれを裏付ける綿密な計画こそが大切である。

「富士には月見草がよくあう」という某文章から引用すれば、

「探検部には野球がよく似合う」という文句をこの文章の締めとしたい。



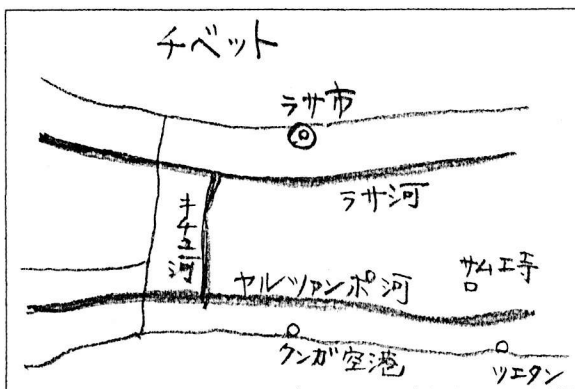


チベットをトレッキングして

1965年卒 河合武臣

私と高松氏は、1994年7月31日から8月15日までの予定で、チベットトレッキングの旅に出かけた。ヒマラヤをチベット側からランドクルーザーでヒマラヤ越えする、またその途中の観光、例えばチベット仏教寺院の見学など観光目的も含めて、7月31日成田を立ったのであった。

天山トレッキングに参加したときとおなじで、今回もチベットの都ラサヘたどり着くのに、上海一泊、成都一泊し、そして、やっとラサ郊外のクンガ空港に到着したのは、出発後三日目であった。成田ーラサ間、もし直通ならば約七時間の飛行時間である。一日でいける距離である。そうできないところに、あるいは、意図的にしないのが当たっているかもしれないが、それが、中国の現状である。残念ながら、お客様本位ではない。考えようによっては、徹底的に自己本位でもある。そんな疑問をもちながら、納得できないまま、とにかく、目的地にやっと着いたのだった。



クンガ空港に着き飛行機から降り、積み込んだ荷物一登山用リュックを肩にしょって5、6歩歩くと、軽いめまいを感じる。海拔約3600m位、富士山の頂上ほどの高さの所に着いたからである。ここだけ高いというのではない。50m、100mは低くなることはあっても、それ以下は

ない。これがチベットなのかと思う。ゆっくりの行動が高山病から守ってくれる。なので、自然と慎重な動きになる。

空港の外にでると、通訳の王氏が出迎えてくれる。後で分かったのだが年令23才で漢民族出身、四川省重慶に住んでいるとのことである。車に案内されて、リュックを積み込み、そして、乗る。運転手も紹介され、私たち2人も自己紹介する。これからずっと一緒に旅することになるので、挨拶を交わす。運転手氏は、50才位のがっしりしたチベット人である。ここから4人の旅が始まった。

ツェタンに向かって車を走らせる。とうとうと流れるヤルツァンボ河に沿って走る。木や草のない岩石で出来ている山が遠く河を取りまくように

続く。車の走っているところが3600mとすると、その上に300mから500m位はある山だとしたら4000m位の高さにはなるだろうか。

そんな景色をゆっくりながめている暇は、すぐなくなってしまった。空港からツェタンへ至る道は、進むとすぐにコンクリートの道はなくなり砂利道になった。砂利道を走るならまだいい。その道のいたる所、工事中で通れない。男も女も子どもも手作業で道路に石をきれいに並べている。チベット人の道路工事アルバイトというところか。車はその度に迂回する。その迂回路が、ひどいの一言。上下左右に大揺れ。揺れる度、体の内臓がごちゃ混ぜになる感じになる。車の天井近くにつかまる所があるので、しっかりと手でにぎっているが、頭をぶつけそうになったことも数度ある。その度に、激しい頭痛を引き起こす。まるで、拷問である。道路、そして迂回路、また道路そして迂回路、何度も何度もこれを繰り返す。私はすっかり、空気の薄い中での、この激しい揺れに、体調を崩してぐったりして、ただ耐えるよりしかたがなかった。頭痛、ひどい寒気、臭覚の異常、手のしびれが発生。これに景色が黄色く見えれば、もうこれは立派な高山病だそうである。すぐ厚着をし、体を暖め症状を和らげる。景色が黄色く見える立派さは避けられた。運転手君は、ベテランらしくでこぼこ道をお客の状態におかまいなく車を飛ばす。通訳は、人間が飛び上がる度に、上手な日本語で「大丈夫ですか？」を連発するのみ。おまけに、やっと車から降りての昼食もそこそこ、今日の予定を変更して明日の見学予定を今回ってよいか、とたたみかける。車酔いで頭もぼっとして判断力もないわれわれは、我々の乗船を待って、すぐにも向こう岸まで出発しようとしている船を目前に見ながら、せきたてられるまま、まるで、夢遊病者のように了解して船に乗ってしまった。岸の向こうのサムエ寺の見学のために。

広いヤルツァン河を渡る。船の上での私は、深呼吸を繰り返したりして、疲れと頭痛を和らげようと努力する。深呼吸のたび、通訳の王氏は心配そうに私に声をかける。「河合さん、大丈夫ですか？ハーハするのでびっくりしました。お医者さんに見てもらいましょうか？」その度に私は、「いや、大丈夫です。症状を和らげるためにやっているのです。」

流れに逆らって約50分で岸に着いた。寺は見えない。ここから、トラックに乗ってサムエ寺まで行くとのこと。トラックの荷台にチベット人8人、ヨーロッパ人2人、日本人2人、通訳ガイド1人が乗る。トラックの揺れもひどい。座ってられない。立ってつかまって、じっと耐えている他はない。跳ね上がる度に荷物が移動する。

20分から30分後にやっと着いた。よくもまあこんな山の中に大きな寺を立てたものだ、と感心する。私は、頭痛と吐き気とめまいと戦いながら、通訳の王氏に荷物を少しの間持ってもらいながら、休み休み見学を

終えることが出来たのであった。あでやかに飾った仏像、どの仏像も金色で、青や赤や宝石で飾ってある。同じ仏教でも日本の清楚な仏像とは、雲泥の違いである。急な見学で写真のフィルムの予備は河の向こうの車の中だ。フィルムが切れてしまったことを高松氏と共にぼやきながらも見学を続ける。

さて、サムエ寺見学も何とか終わり、トラックで川まで来て、船でヤルツァンボ河を渡る。ツェタン飯店午後8時40分頃着く。ホテルまでやはり道路工事中で、道なき道の迂回のためものすごく車がゆれ、体がかき回され、具合が悪くなる。

8月3日 昨日の疲れで私は、ホテルで休養する。元気な高松氏はツェタン見学に出かける。

8月4日 8時25分ラサへ出発。途中、草原でチベット人の祭での馬の競走の練習を見学。ラサ市郊外のガソリンスタンドで汚れきったランドクルーザーを洗車する。午後3時40分頃ラサ日光賓館に到着する。腕時計の高度は3560mを示している。調整はしていないので若干の誤差はある。1103号室に入る。

8月5日 7時40分起床。8時40分朝食。ポタラ宮見学。薄暗く狭い通路や階段を昇り降りしたくさんの金色の仏像を見る。ヤクからつくったバターの蠟燭の火からは、独特の臭い匂いがでて鼻を刺激する。蠟燭にてらされた暗闇のどこかに僧侶が座っていたり立っていたりする。通訳の王氏は、僧侶に話しかけこれが何という仏像か何という壁画かを聞き、我々に通訳してくれる。高松氏は、事前にチベット仏教についての研究をしているため理解できたが、わたしは、ドライラマ、釈迦の名前ぐらいしか分からなかった。とにかく、町の真ん中近くの丘に、町のどこからでも見える大きな宮殿が建っていて、たくさんの部屋があり仏像があり、宝石類に飾られている。観光場所であるが、信仰の場所である。そして、この宮殿の屋上から見るラサ市が緑が多くとてもきれいだ、ということだった。

宮殿のみやげ物の店で、ポタラ宮の写真集150元（1800円）、チベットの地図50元（600円）で買う。後で地図に印刷されていた値段を見たら4元だった。観光地は高い。資料などは町の大きな書店で買うと定価で買える。通訳やガイドは、特定の店とつながっていることが多いので、むしろ、買わせようとする。だから、高いからやめたほうがよい等のアドバイスはしてくれない。いろいろと日本人の財布の紐をゆるめにかかると思っていた方がよいだろう。

私がチベットに興味を持ったのは、世界の屋根といわれるところを見てみたい一心だった。小学校の理科の教科書にもエベレストの頂上付近の写真が載せられている。地層が見え、エベレストも昔は、海だったとある。

世界の屋根はどんな所か確かめてみたい。旅行の大きな目的でもあったので、そのことの感想を述べて、旅行紀その1をひとまず終わりにしたい。

現代の地質学の教えるところによれば、プレートに乗って南から移動してきたインド亜大陸が衝突してヒマラヤ山脈ができた。今もヒマラヤは、上昇し続けているんだと。

世界の屋根に私は夢をふくらませ、自分なりにイメージを持っていた。しかし、チベットは、静かでやさしい景色が広がっていた。

荒々しい景色は山の方だけということか。

おかしい、こんなはずではない。もっともっとはげしい、迫力のある自然がすぐ身近にあるはずだ。なにせ、8000m級の山がある所だから…。

しかし、考えていくうちに、次第に8000mの山がなんだ、と思うようになってしまった。日本の最高峰富士山は3776m、地面が3600m隆起して底上げをしたら7336mの山に成長するではないか。日本でも、山のそばまでいかないと遠くからでは、その存在はわからない。こう考えるとやさしい景色の広がりも納得できる。プレートテクトニクス理論の証明か…。日本全体を4000m位上げたのと同じことか…。

世界の屋根にいささかがっかりした。3600mのチベットから8000mを眺めてもあまり迫力はないと。下から上まで8000mの山は存在しない。あるのは、上げ底の山だ。そう考えていくと、出発前に高度順化のため、高松氏と一泊して登頂した富士山が今までよりはるかに、なつかしく、おおきくて、立派な山に思えてきた。そして、山は、上げ底の高さではなく、本当の山の高さでくらべるべきだとも思えてきたのであった。

私なりのイメージやあこがれがやぶれてしまったが、そばまで来て真の姿に目をふれただけでも、よかったと思っている。目前に上げ底8000m級の山々を見ずに帰って来ることになってしまったことが、心残りであるが。

しかし、今までにない新しい認識を得られたことが収穫だったかも知れない。そして、冷静な思いになって、再び眺め直してみることも必要なことに違いない。きっと私の知らない迫力あるチベットが、あるいはヒマラヤが、どこかにかならずあるに違いないと、最近、そういう思いが心に浮かびはじめてきている。

チベット縦断トレッキングツアー

高松 康夫

今年（1994年）、私は「チベット縦断1,000kmのトレッキングツアー」を計画し、探検・探査の会に同好の会員を募りました。その折り、次のように記しました。

《チベットは、85年に解放されて団体および個人ツアーが入境可能となり、秘境が身近なものになりました。しかし、89年3月ラサで独立要求のラマ僧による「暴動」が起き、90年5月まで戒厳令が敷かれ、それ以後しばらくの間個人入境が困難になりました。そして去年5月、また独立要求のデモが起き、以後中国の旅行会社を通さないと個人は勿論、団体ツアーも難しい状況が続いています。今年は5月にデモが起きない限り、徐々に団体および個人ツアーが可能と思われます。ただし、中国側からラサに入るよりネパールのカトマンズから空路での入境のほうが確実のようです。――日程は7月下旬～8月中旬頃にかけて2～3週間を予定。》

計画実施期限ぎりぎりであったが、河合氏が参加を申し出られたのでさっそく旅行会社に手配を頼み、7月31日～8月15日までの16日間のトレッキングツアーが実現できた（できれば、3週間ぐらいが望ましいが、日程調整上やむをえなかった）。

行程は、若干変更となり、成田――上海――成都――ラサ――ツェタン――ラサ――シガツェ――ティンリー――ザンム（国境）――カトマンズ となった。

費用は、旅行会社手配の払込み個人旅行経費として約42万円、現地経費を含む総ての諸経費として約10万円。

（当初の予定経費をうわまったが、旅行会社募集のツアー参加払込み経費に比べると約10万円安い。）

私がチベットに興味を抱いたのは20数年前のことである。きっかけは、

河口慧海の「チベット旅行記」（講談社学術文庫）を読んだことによる。それまで、漠然とチベットは秘境というイメージをもってはいたが、日本人として初めて（1900年）、その秘境にしかも単身で潜入したのが一僧侶であったことを知って、私は愕然とした。チベット探検としては、ヘディン、ブルジェワルスキーが有名であったが、大谷探検隊はチベットには入っていなかったはずである。慧海は、仏教經典のチベット大蔵經を求めてチベットへ入境したのだが、その観察力、体力、忍耐力ともに優れ、探検家としても評価されている。

私は慧海を知り、チベットを知り、探検精神を鼓舞され、興奮した。以後チベットに関する図書・資料を集め読んでいくうち、チベットの歴史、現代の政治状況、民族、チベット仏教（ラマ教）、ヒマラヤ山岳等についてさらに知るようになり、河口慧海の探検コースを追体験してみたいと思ったり、チベット仏教（特にマンダラ）に関心を持つようになった。

現代においても、チベットはつい最近まで政治的には秘境であった。1959年中国の侵略により、ダライ・ラマ14世がインドに亡命し、チベットは中国の支配下に置かれ、65年自治区の一つとなった。85年のチベット・ラサの解放により、やっと一般外国人がラサをはじめ、一部の地域に入境できるようになった。チベットを象徴をするラサのポタラ宮をこの目で見るのが現実となったのだ！

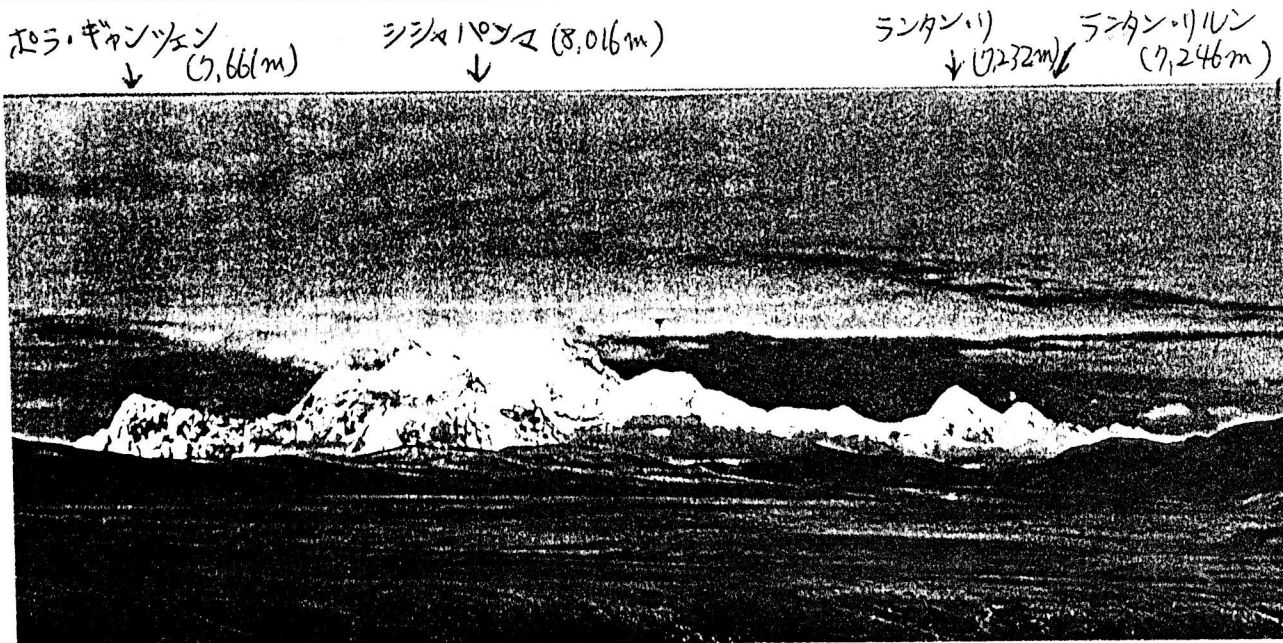
1987年夏、私は単身成田を飛び立った。荷物はザック一つとカメラの入ったサブザック二つ。成都からラサまでの飛行中において、窓からミニヤ・コンカと思われる山容を見ることができた。そして1年前までの数年にわたる探査会による中国遠征計画のあれこれの経過と挫折を想起したりしたものであった。これでやっと自分自身の「探検」ができるのだ。登山ではないが、自分にとって未知であり、憧憬の地であり続けたチベット・ラサへの、誰にも制約されない自由旅行であることがなによりであった。個人旅行で来ている日本人、外国人、チベット人との出会

い、五体投地で巡礼する遠方よりの巡礼者、ポタラ宮を見おろすかのごとき小高い丘の上からの尺八の吹奏・・・あまり遠出は出来なかったが、のびりとラサの雰囲気味わった。しかし、もう一つの目的であったカトマンズへ抜けることは、残念ながら日程に余裕がなくなりできなかった。

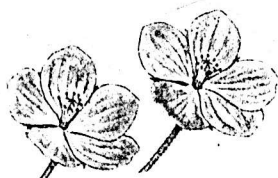
あれから7年が経過した。

今回のチベット・トレッキングは私にとっては2度目の旅である。しかし今回は仲間がおり、滞在型ではなく、基本的に車で移動する旅である。ラサをはじめチベットの主要な城下町を東から西へ巡り、最後にチョモランマとシシャパンマを眺望して5220mの峠を越え、一気に下り国境の町ザンムーを経てネパールのカトマンズへ抜ける旅である。

私はこの旅では、主目的を寺院とチベット仏教を代表するマンダラ図、タンカ（軸装の仏画）をじっくり鑑賞するとともにできるだけ写真に撮ることとした。この目的は一部を除きまずまず達成できたと思われる。チョモランマは雲のためわずかに遠望できたに過ぎないが、シシャパンマと7000m級、6000m級の高山はかなりの迫力で眺望できた。さすがにヒマラヤ、しかもチベット高原からの眺望は素晴らしいの一言につきる。テントでも張って一晩過ごしたいくらいであった。（続く）



- (注) ① ○印は参加者です。 無印は不参加者です。
 ② 勤務先記入者は非会員です。 勤務先未記入者は会員ですので、名簿を参照ください。
 ③ 原稿はスペース上、短くしてあるものもありますので、ご了承下さい。



—成田佳紀 (S41年)—

セガの企画に参加できずに大変残念です。
 現在「秩父自然の会」の事務局をやっており 当日は
 秩父祭りの為 全国からお客や仲間が秩父に集合
 します。残念な一言、皆様によりしくお伝え下さい。
 ええでやっていたと言いたいのですが 父も半ばを過ぎると
 物なかないう事を言えません。それでもなんとかやっています。
 台湾の動物調査は、狩猟の全面禁止の影響で、おれが
 思った様にはいきませんが、それでも懲りずに年に3回足を運
 んでいます。今は、台湾原住民(特に台東の6族)の狩猟採集
 文化のデータ集めをしています。台湾はとても良い所です。
 休年後は台湾に住もうと いろいろ準備もしているところです。
 その時はぜひ遊びに来て下さい。台湾にもまだまだ冒険や
 探検をする場所がたにたくさんありますよ。

—〇紙村徹 (S42年)—

今夏も、1ヵ月半程度、恒例のニューギニア詣で。
 セビック河流域の大湿原の漂流域に踏み
 込んできた。私の友人、マクロニズムの
 人類学者には、やはり、こういう奥地の「未開部族」
 (オット、これは今や死語、差別語!!)との出会い
 が、何よりもの回春剤。途中で、テレビ朝日の
 取材ロケにも、からがいつ、満ちた杯を探して
 迷り込みました(これは10月13日にテレビ朝日系で
 「これは知ってナイト」として放映されたはず)。
 帰りは、シンガポールで、ファインセと落合の手配が、
 具にハズレ。いつまでもドチな私はありました。

○小森享二 (S43年)

大学を卒業して早いもので22年半が経過した。すなわち、卒業した時の年齢が22才半であり、この頃から時間軸のど真中の大学卒業時と可成り両端に自分がこの世に生きた時の現在が位置する訳である。子供、学生の頃は小学何年生の頃の時の経過を確認できた。今では自分の子供の成長が尺度となり、その時の経過を知るという案配だ。中年とは自分の人生に「あと何年くらい残っているか」と考へ始める年齢というのである。確かにXのような気がする。又陰様で今、失業しない会社勤めをし、妻と3人の娘(高3、中3、小6)と平和に暮らしている。不満と言、それはバチが当る。感謝しなきゃと思ふ。年齢を重ねれば体から記憶力は間違いなく衰へていく。しかし何故か忍耐力は強くなっていく気がする。ゆかり益々忍耐力が要求される年代にX、といふ。うそで言っているのかもしれない。この頃である。



○三浦茂 (S44年)

卒業以来20年を経る。今更には月日の経過に愕然たる思ひがある。

OB総会に何回か出席してはいますが、懐かしいX:11-1に逢うのは、とて親しく今回遠路より参加の方も多いとのこと。楽しみでしてはいます。

○長瀬松男 (S45年・十六銀行名古屋支店)

「OBの集い」に戸を掛けていたに違いない。ふりかとうにふります。

卒業後は「皆」と会う機会も無く。今回は最後まで参加して参りたいと思ひます。

早いもので、小生の銀行員生活も20年が過ぎ、歴任者も10分者目となりました。

売物は今でも若いつもりですが、今更に思ふたびに白髪が増えてくるのが氣になります。

積込の行も少し振ります。楽しみにしてあります。どうかよろしくお願いします。

折角のお誘いではありますが、非常に残念な^はのですが、

1/3、今は弘前に2仕事が入りまして、会には

出席できません。皆様へはよくお伝えを
ます様お願い致します。

お事ではありますが、言わゆる「ふるさと人事」で仙台に
戻り、居を構えることも出来ました。

次の機会に是非お会いできることを楽しみにして
おります。

ご無沙汰しておりますが、皆様お変わりございませんでしょうか。
さて、この度の会合ですが、当方残念ながら以下の諸事由により出席できません。

- ① 二人目の子の出産予定日が真近に迫っていること。
- ② 年末工期の仕事が、今年は特に山積していること。
- ③ 不肖ワタシのXX回目の誕生日であること。



とりわけ、①の理由はなかなかの強力でありまして、昔(メモリー)を取るか、今(ファミ
リー)を取るかという次第になりますと、どうも前者の旗色が十分悪そうです。で、大変
申し訳ありませんが、今回はパスさせていただきます。当方の近況等につきましては、恐ら
く当日出席されるでありましよう宮木茂さんに同えば、概ねお判りかと存じますゆえ。

なお私共一家、今年の2月に丹沢山麓方面(秦野市)に転居いたしました。都心からは
少々離れた不便な場所になってしまいましたが、それでも、アウトドア・フィールド・ワーキ
ング・ライフ・スタイル(何のこっちゃら?)なんぞを志す輩にとっては結構恵まれた立地で
ございます(田舎ボケ中年になってしまう可能性も多分にあり)。近傍へおいでの折には、
ぜひ一度お立ち寄りください。歓待いたします。

末筆ながら、探検部並びにそれに深く係る皆々様の今後の一層のご活躍、ご健勝をお祈り
いたしております。

○松下明 (S46年・静岡市役所)

学校を卒業し、早くも18年が過ぎ、ちやうど大学に入學した数と同じになりました。妻と娘2人の一家4人で実に平凡な毎日を送っています。昨年の夏我が家4人は、オーストラリアのシドニー領事館に勤務していた大竹米藏君(旧姓福田君)^(S46年入学)を訪問しました。現在、大竹君は在タンガニヤ日本大使館(ダルエスサラーム)に勤務しています。この機会にサバンナの国に行ってみたいと思っています。



○町田龍 (S47年)

ご連絡いただき、ありがとう ございました。

20才を、フラフラ(海外放浪)して来たせいか、40才を過ぎローンに退かれながら、リストウにむめげず、電子部品メーカーのソフトウェアSEとして生かしています。家族は男の子(7才と3才)を含め4人家族。夏はプール(本当は海外でクルージングと叫びたいが)とハイキング、冬はスキーを楽しんでいます。

そのうちサファリツアー、長期のスキー・クルージング等をしたいのですが、なかなか。スケールの大きなホームル教習会を楽しみにしています。(S47年入学 町田 龍)

○高橋尚之 (S 4 7 年)

'70年代前半の頃には空気が暖かかったせいか、年末
の土曜日から。翌年からはとて嫌悪し、又、会社い
なすところないという気持がずっと続いた。'90と20'年近
くに訪れた人を探している。

都府に上つた。其の日に8回目を完成した。
 途人な人に逢ふたが、一泊したところであり、日暮り
 空には月を照らすことがあつた。

$\frac{1}{A}$ を F に代入するとは、 P_c のかわりに $\frac{1}{A}$ 年入りをと、明らかに10年間には差がつかないであろうか？
年々増える度、累積して訪ねる人々になる。いづれ月給を減らさないとすると、それは可成りな大問題。



野口道章 (S 5 2年)

いつもご案内ありがとうございます(今回も参加できずすみません)

現在、名古屋へ転勤にて来て ほぼ5年が立ちました。

小森幹事とは 同い会社でもあり 時々 お会いします

が、このうな懇親会も近ければすぐ参加できると

残念です。(仕事の都合がつかないほう行こうと思っているんですが...)

OB会も年々盛況でうれしく思っています。

私達の時代は余り活発な(目立つ)活動がなく部歴にも残って

いいいと思われちゃが、それでもあの夏の諸先輩方を

想うとばかりし お会いしたい気持ちでいっぱいです。

16期のメンバー(副部長)2人ともすでに独身でした。

この度やっと1人が結婚することです。

今後村の活躍をお祈りしております。

現 役 か ら の 報 告 ～ 遠 征 に つ い て ～

今年度の春休みを利用し、ネパール・アンナプルナ山域に位置するチュルー・イースト峰に登山隊を派遣することになりました。この山はトレッキングピークの一つではありますが、比較的奥深いことと、幾つかの峰からなる連山になっていることからかなり菌応えのある遠征になるかと思えます。隊員は主に現役からなり、OB一名を含む6人編成の小さな隊です。それゆえにまず「安全」を第一とし行動するつもりですので、ご支援ご理解のほどよろしくお願いします。

チュルー登山隊隊長 稲田 俊（1991年度入学）

計 画 概 要

隊の名称	横浜市立大学探検部 チュルー登山隊		
期間	1995年2月25日～4月4日（39日間）		
目標峰	ネパール王国 アンナプルナ山域 チュルー・イースト峰（6,600 ㍎）		
目的	6,000 ㍎ 峰の登頂		
行動概要	1995年2月25日	先発隊出国～バンコク	
	27日	バンコク～カトマンズ	
	3月1日	後発隊出国～バンコク	
	2日	バンコク～カトマンズ	合流
	4日	トレッキング開始	
		トレッキング12日間	
	16日	ベースキャンプ設営（4,600 ㍎）	
		登山活動12日間	
	28日	ベースキャンプ撤収	
	4月4日	カトマンズ着 現地解散	
予算	162万		
隊員	6名		
大学	横浜市立大学	横浜市金沢区瀬戸22-2	
後援	横浜市立大学	探検・探査の会	

事務局からのお知らせ

川尻哲夫

(1) 今後の探探会の運営について〔提案〕

① 運営方法の改善

- 平成4年2月15日に会が正式に発足して以来、3年を経過しようとしています。その間、天山登山隊の後援、現役探検部活動への支援、現役・OB同士の交流、会報誌の発行など、当初の目的は一応達成してはいますが、今後もさらに活動を活発化するためには、会の運営方法を改善することが必要と考えます。

(イ) 幹事(現12名)の役割・分担を明確に

- ・一部の幹事に負担がかかる一方、全く会に出席もしない幹事の方もいます。出席ができないことは、それぞれの事情があつてのことで止むを得ない場合もありますが、せめて連絡だけでもしていただきたいものです。また、出席しなくてもできる活動はあるはずですから、それを担うことで負荷の分散を図ることが大切です。
- ・そのためには、幹事の役割を総会時にしっかりと決めておくことが必要です。是非、第4回の総会ではもう一度その分担を確認し合ひましょう。

(ロ) 会員の把握と会費の収納状況も明確に

- ・残念なことですが、会費を収めてない方もいます。この方々にも会報誌や様々な案内物を郵送していますので、通信費は増えて、財政を圧迫しています。
- ・総会後に会員の意志確認と会費の督促をした上で、最新版の会員名簿の発行と会計収支状況を発表いたします。

(ハ) 定例会の進め方の見直しを

- ・本年度は2回の定例会と1回の総会を開催しましたが、どうも顔合わせだけで終わってしまいがちです。かと言って、いたずらに開催回数を増やすことは一部の幹事の負担が増えるばかりです。
- ・そこで、(イ)にも関連しますが、定例会において幹事が自分の担当についての議題がある場合は、責任をもって進行する(例・招集、司会、資料作成等)ことの徹底を図りましょう。私達の職場では日常当たり前にやっていることも、OB会では人まかせになりがちです。
- ・又、総会司会も交替制にするのもひとつの方法です。

(ニ) 相互連絡網の強化を

- ・会発足当初は連絡網のようなものがあつたのですが、今は一部の幹事間だけでの繋がりになっています。幹事及び首都圏の会員まで広げた連絡網を作って、相互連絡をより密にしたいかがでしょうか？
- ・会合の招集状を出すことは、現役諸君にも負担がかかるものです。電話やFAXでA氏→B氏→C氏というように幹事以外の人にもメッセージを伝える仕組みは、文書伝達を補完するものとして有効です。

② 「中央アジア研究会」活動を継続しよう

- いろんな研究会を作ろう、と理想をブチまけても、それぞれの仕事、家庭環境、居住地などの条件が違うのでなかなか難しいものです。探探会のルーツはやはり「天山探査」にあるだけに、会としての中心となる活動地域は「中央アジア」に置くべきではないでしょうか？これまでの積み重ねもあり、第三次登山隊だけで終わることは惜しいものです。具体的な遠征隊はまだ先としても、研究会活動は継続しておいた方がバックボーンは強くなります。無論、他の地域・テーマに興味ある方がそれぞれの活動することを妨げるものではありませんが、「中央アジア情報センター」のような機能を持つことを会の特色にしたいかがでしょうか。

(尚、本提案は私の個人的なものであり、事務局としての公式提案ではないことを付け加えておきます。あらためて、詳しく述べてみたいと思います)

(2) 「天山登山隊報告会」、「40年代OBの集い」が盛況に開かれました。

○ 昨年12月3日(土)午後3時、市大商文棟5階において「第三次天山登山隊報告会」が開催されました。故西堀秀二氏の奥様西堀玲子氏、旧探査会森下市朗氏はじめ35名が参加のもと、広大なトムール峰のスライド写真をまじえた体験談が熱っぽく語られました。

残念ながら、登頂こそできなかったものの、隊員にとっては仕事と生活を犠牲にしての挑戦であり、胸を打つものが感じられました。

また、本会には探検部だけでなく山岳部関係者も出席し、なごやかな雰囲気の中で交流が図られました。今後の私達の活動には、山岳部との共同は欠かせないものがあります。今後もできるかぎり、山岳部によびかけていきたいものです。

○ 続いて、午後7時から、八景駅そばの旅館「皆楽園」にて、「昭和40年代探検部OBの集い」が開かれました。この年代の人達は、団塊の世代の前後の人達であり、大学紛争のピークを体験した人達でもあります。こちらには14名が参加し、中には20何年ぶりの再開という者同士もありました。

今は皆、オヤジといわれる年になりましたが、探検部のことは青春のひと駒として忘れられないようです。探検会には入らないが、この会合には参加するという人が4名もいたことは、今でも探検精神は仕事のなかで生きているのでしょうか？

次回のこの集いは21世紀(!)にまた横浜で開催しようと、翌朝、八景島シーパラダイスで誓い合い解散しました。

(尚、参加者、不参加者の自筆の近況文を掲載してありますので、ご覧ください)

天山トムール峰登山隊報告会(1994年12月3日(土)午後3時~6時30分・市大商文棟5階会議室)



昭和40年代OBの集い (同日午後7時~翌日11時・金沢八景駅そば「皆楽園」)

編集後記

会報誌第三号をおとどけします。

原稿を送っていただきありがとうございました。

昨年の夏は、天山トムール峰登山隊の後援をしました。トムールは登頂できませんでしたが、ムスターグ・アタ峰登頂と全員無事下山できて何よりでした。今回も会報誌の印刷に市大の高松氏および探検部学生の協力をお願いしました。

今年も会員のみなさんの健康とご活躍をお祈りいたします。

(河合)

探検・探査の会 第三号

発行年月日	1995.2.11
編集発行者	横浜市立大学 探検・探査の会 代表 大野正夫
編集委員	河合・高松 大原・立木